2024年（令和6年）
6月号（No. 949）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

全国山岳古道調査を盛り上げ
初夏の熊野古道集中山行を実施

全国山岳古道調査PT

本会創立120周年記念事業の一つ「全国山岳古道調査」が各支部や同好会の協力の下、佳境に入っているが、このプロジェクトを応援すべく「熊野古道集中山行」が企画された。全国から集まった130余名の参加者が、初夏の爽やかな風に吹かれながら、それぞれのコースから熊野本宮大社旧社地の大斎原を目指した。

日本を代表する山岳古道として日本国内はもとより海外にも名前が知られている熊野古道。修験者がたどり、天皇や貴族が熊野三社を参拝するために歩いた、歴史が積もる古い道である。

熊野古道には伊勢神宮から出て海沿いの峠をいくつも越える**伊勢路**。大阪から紀伊路をたどって紀州の紀伊田辺に至り、そこから二手に分かれて、一つは**大辺路**と称し海沿いに、もう一つは**中辺路**と呼ばれる丘陵や低山をたどって熊野三社に向かう道。一方、高野山からは1000m級の5つの峠と紀伊山中に深く刻まれた4つの谷を越え、最低でも3泊4日で本宮大社に至る**小辺路**という厳しい道のりがある。さらに厳しいのが、修験の聖地として名高い**大峯奥駈道**で、この道は日本百名山の一つ、大峰山(山上ヶ岳)を含む標高1500～2000mの稜線を、5泊6日かけてたどるものである。

日本山岳会創立120周年記念事業の一つ、全国山岳古道調査プロジェクトでは、各支部や同好会に協力をいただいて作り上げている120古道調査を、もっと一般の会員にも身近に感じて欲しい。さらに、古道を歩くことはこんなに楽しいものだと多くの人に体感して欲しいとの考えから、日本を代表する山岳古道、熊野古道で集中山行を企画した。

コースは熊野古道のうち、歴史のある紀伊田辺から本宮大社への中辺路、那智大社から本宮大社に向かう中辺路大雲取越・小雲取越コースの2つの中辺路をはじめとして小辺路、大峯奥駈道の4コース。ほかに中辺路の赤木越・大日越を歩く支部パーティもあり、そこを北は北海道から南は東九州まで130名を超える会員がたどって、初夏の麗しい風景の中の古道歩きを堪能した。

約束の5月18日の15時、目的地の本宮大社旧社地の大斎原には沖

中辺路・滝尻王子から林間の古道歩きをスタートする

目　次

全国山岳古道調査を盛り上げ
初夏の熊野古道集中山行を実施 …1
第37回全国支部懇談会を
神奈川県平塚市で開催 ……6
岡野金次郎碑前祭（5月25日）……8
支部長が代りました ……9
山の名著再読 ……10
コーカサス山麓に桜を植えよう
ジョージアの人々と文化交流を …12
支部だより ……13
図書紹介 ……14
会務報告 ……16
ルーム日誌 ……17
新入会員 ……17
INFORMATION ……19
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

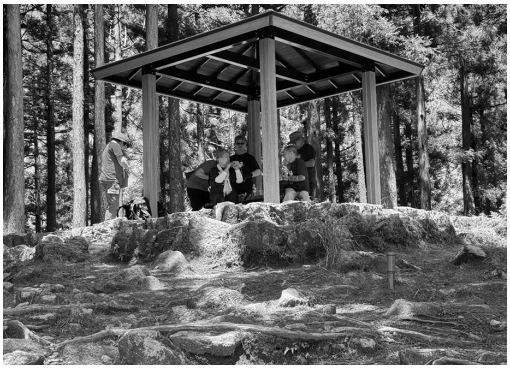
中辺路・立ち寄り展望所から見下ろした大斎原と大鳥居

崎吉信さんをはじめ新宮山彦ぐるーぷの会員も多く駆けつけてくれ、長い道のりを歩き通した喜びと、ひとときの邂逅を祝した。

大斎原に集まった会員のうち90名はそのままバスで当日の宿舎、紀伊勝浦のホテル浦島に向かい、長旅の疲れを温泉で癒した。もちろん晩の懇親会が盛り上がったことは、ご想像のとおりである。

翌日は銘々好きなルートで帰途についたが、その胸中には日本を代表する山岳古道の印象と思い出が、いっぱい詰まっていたに違いない。

（全国山岳古道調査プロジェクト・チーム　近藤雅幸）


中辺路・大雲取越の舟見茶屋跡でひと休み

◆中辺路（紀伊田辺～本宮大社）

古から熊野に参拝に向かった貴族の多くが、参詣道として利用した紀伊田辺から熊野本宮の道は中辺路と呼ばれ、最もポピュラーな道であった。私たちはそのルートをたどり熊野本宮を目指した。途中、発心門王子からは1日コースのメンバーも合流し、総勢20名に。出発点は紀伊田辺。各地からそれぞれの方法で集まった。紀伊田辺は和歌山県南部の中心的な町で、駅前も整備が進み、熊野古道の玄関として好印象である。

2日目、ホテルのフロントに集合し、タクシーで滝尻王子まで入る。多くの人がこの滝尻から中辺路を歩く。観光案内所「熊野古道館」に立ち寄り、スタンプ帳を100円で購入する。このスタンプ帳は要所要所でスタンプを押すことが歩行の励みになる。

滝尻王子社の裏から杉林に入り、中辺路がスタートする。胎内くぐり、不寝王子といきなりの急登に先が心配になる。剣山を越えると傾斜が緩くなり、高原熊野神社に着く。この先の休憩所は眺めも良く、ここで昼食として、のんびりとしたひとときを過ごす。

この先は人家もない山道が続き、ただ黙々と歩く。牛馬童子口で車道に出て道の駅に立ち寄ると、あとひと息だ。再び山道に入り、かわいらしい牛馬童子の像を見て峠を下っていくと、2日目の宿のある近露の集落に着く。宿は「まんまる」という84歳の主人が切り盛りする民宿で、東九州支部の別グループと同宿になる。

3日目、6時30分に近露をスタート。しばらくは車道と交差しながら野中、継桜と民家のある集落を抜けていく。小広峠から沢に下り、地滑りのため通行ができなくなった岩神王子を迂回して岩上峠を抜ける。湯川王子にいったん下って、さらに三越峠を越える。疲れも出てきてなかなかきつい。群馬支部の若い2名が颯爽と抜いていった。さらに音無川に下り、最後の登りを耐え発心門王子にたどり着く。ここから熊野本宮の領域ということで身も引き締まる感じだが、最後の行程は明日に残し、宿の送迎車で川湯温泉に向かう。

4日目は勝浦からのチャーター・バスにピックアップしてもらい、再度、発心門王子へ。ここで1日コースと合流、熊野本宮を目指すことになる。発心門から本宮は歩く人も多く、整備された道が続く。和泉式部のころには本宮の鳥居が見えたという伏拝王子からは鳥居は見えず、地元の人の営む茶屋でくつろぐ。三軒茶屋で小辺路を合わせ、その先の立ち寄り展望所に寄り道すると大斎原の大きな鳥居が見える。古に山道を越えてきた人々と同様、感動ものである。

（山行委員会　長島泰博）

熊野古道山行の4泊3日のコースに参加し、3日目に1日コースと合流した。北は北海道から南は九州まで、多くの方々とご一緒させていただいた。時に歓談して時

に黙々と登って下って、山、自然、そこにある先人の暮らしそのものに身を置き、時間を忘れ、至福な一刻一刻を過ごせた。

山行中に、多くの海外の方ともすれ違っていた。「外国人が多いですね」と話しているうちに、私自身も外国人、そして自然の中の一生き物だと再意識させられた。生きる、生き続けることは、自然との共生、人との出会い、そして歩き続けることだとも、再度気付かされた。感謝感謝。

（北海道支部　李曼葛）

◆中辺路（大雲取越、小雲取越）

熊野那智大社から大斎原・熊野本宮大社までの約30㎞、中辺路を2日かけて歩いた。

参加者は、全ルートを歩くDコース（23名）、2日目に小口自然の家から歩くCコース（8名）、計31名。内スタッフ7名はほぼ本部の同好会、マウンテンカルチャークラブのメンバーだ。

5月17日、からりと晴れた青空の下、全コースを歩く参加者が熊野那智大社に集まった。リーダーの高橋さんが事前に計画していたように前半、後半の2チームに分かれ出発。汗ばむ陽気だけれど、杉木立を縫ってそよぐ風が心地良く、蒸し暑くない。約600m標高を上げ、舟見茶屋跡に到着。紀伊勝浦の街や海、懇親会の行なわれるホテル浦島も見える。昔の人のように舟を見つつ一服。

色川辻まで下る。林道分岐から地蔵茶屋跡まで登山道が崩れているのか、舗装路歩きが長い。地図を確認しつつ3人で前半チーム最後尾を歩いていたら、先頭の堀池さんが迎えに来てくれた。広々した地蔵茶屋跡の東屋でお昼をとる。

越前峠手前の登りで、後半スタッフの成田さんが汗だくで追い掛けてきた。後ろは離れそうだからと、宿の部屋割表を届けに来たのだ。まさに飛脚！

さて、いよいよ難所の胴切坂だ。柔らかな木漏れ日の映る石畳の急坂は滑る心配はないが、ひたすら樹林帯の中を歩いて6時間経過、膝痛を抱える参加者には辛い。句碑を読んだり、植物を愛でたりして、長い石畳の道を下った。

ようやく眼下に小口の河原が見えたころ、先に到着した堀池さんが戻って来た。後半チームが暗闇を歩くことになりそうなので、予備のヘッドランプを持って応援に行くと言う。この坂を往復とは、ここにも飛脚！

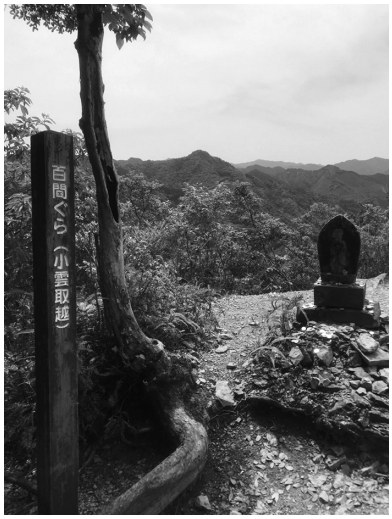
2日目も快晴、皆さんゆっくり休んで元気復活。高橋さんの判断で予定より1時間早く7名が出発。2名は、発心門王子から中辺路（紀伊田辺～本宮大社）を歩くコースに変更。海外からの宿泊者が参加者のひとりに年齢を尋ねてきた。「エイティ」の答えにたじろぐ。9時、小口から参加のメンバーが合流し22名で出発。大斎原に車で向かうスタッフ、小口自然の家の方が法螺貝で見送りしてくださる。

小雲取越は、最初の登りを終えると緩やかな起伏が続き、里山の登山道という雰囲気で歩きやすい。前日同様いくつかのグループに分かれたが、たまに電波も入るので最後尾の状況を報告。すれ違う9割が外国人で半袖短パン姿。「コンニチハ」の発音が各国様々で愉しい。百間ぐらからは美しい熊野の山並みが見渡せた。その後緩やかに高度を下げると、ほどなく熊野川が見えた。

請川からは古道PTの近藤さんが車で4往復してくださり、全員が15時ごろ、大斎原に到着できた。

高烏帽子に装束姿の永田弘太郎副会長、娘装束の泉谷崇子さん（スタッフ）が華やかにお出迎え。各地から集結した参加者百名余の顔に、達成感が溢れていた。各地から参加された方々の笑いと歩きに、心震えた2日間だった。

（マウンテンカルチャークラブ　中村真由美）



中辺路・小雲取越の百間ぐら

◆小辺路（高野山～本宮大社）

小辺路は、高野山と熊野という2つの霊場を最短距離で結び、近世には多くの参詣者で栄えた。担当の関西支部では、高野山から3泊4日で全コースを歩くものと、果無峠を越える1日コースの2コ

大斎原で古の装束で参加者を出迎えた永田副会長と泉谷さん

ースを設定した。果無峠コースは十津川温泉に前泊し、翌日、果無峠を越えて熊野本宮・大斎原を目指し、Fコースは高野山から熊野まで3泊4日で歩くものである。なお、高野山からのコースの4日目は果無峠コースと同じである。高野山からのコースは長丁場なうえ、宿の収容能力が限られているため人数を5人に制限した。行程の短い果無峠コースには11名が参加した。四国支部と千葉支部からも1パーティずつの参加があり（四国7名、千葉5名）、果無峠コースを歩いたが、本報告は関西支部パーティの行動を主としている。

5月15日、高野山の千手院橋に集合し、まず小辺路の起点・大滝口（高野七口）を目指し、さらに薄峠を越えて御殿川に下った。小辺路は1000m級の峠5つ（薄峠、水ヶ峰、伯母子峠、三浦峠、果無峠）を越え、4本の川（御殿川、川原樋川、神納川、西川）を渡るが、ほかの川が全て熊野川（十津川）支流であるのに対し、御殿川のみが有田川支流である。

小辺路・果無峠越えの道。背後に熊野の山並みが広がる

御殿川から大滝集落を経由して水ヶ峰に登り返すが、途中から高野龍神スカイラインの車道歩きとなり、水ヶ峰を越えた後も林道の車道歩きが続く。古道らしさが残っていたのは、薄峠から御殿川への下りと、平辻から大股までの下りであった。

5月16日は伯母子峠を越えて三浦口に下ったが（途中、夏虫山と伯母子岳に登った）、登山として考えると、この日が一番すばらしかった。桧峠から伯母子岳にかけて新緑に輝く自然林の美を堪能でき、山頂では大展望が待っていた。また、小屋が2ヶ所（萱小屋跡と伯母子峠）あり、幕営にも適している。

なお、道路崩壊のため伯母子峠から上西家跡までの古道が通行止めとなっており、峠から頂上を経由する迂回路をとらねばならなかった。上西家跡からは長い長い下りが続き、途中、待平屋敷跡の手前あたりから熊野古道らしい石畳の道が部分的に現われる。

5月17日、三浦口から三浦峠を目指す。峠越えそのものは前日に比べると楽で、6時間ほどで国道425号沿いの西中（十津川温泉までバスが通じている）に出るのだが、そこからの車道歩きが長い。しかも、国道は現在通行止めとなっており、大きく北に迂回しなければならなかった。10㎞以上の車道歩きに3時間近い時間を要した。いい加減歩きくたびれたころ十津川温泉に到着し、果無峠コースのメンバーと合流した。

5月18日、16人を8人ずつの2パーティに分け、早朝、宿を出発した。果無峠登山口で四国支部パーティと挨拶を交わす。石畳の急坂を登り、果無集落に至る。民家の手水鉢に活けられたヤマシャクヤクに癒され、世界遺産の碑へ。観光協会のポスターにもなった有名な風景が広がる。ここから八木尾まで西国三十三ヶ所巡礼の観音石仏が祀られて、旅の安全を守ってくれる。途中、大峰山脈の展望に感動しながら果無峠に到着。峠からは急な長い下りが続き、ようやく八木尾に着くと眼前に熊野川が広がる。三軒茶屋跡で中辺路と合流し、祓殿王子を経て熊野本宮大社に無事到着。参拝後、大斎原へ向かう。集合後、皆の健闘を称え合った。

（関西支部　永井和、上森文子）

◆奥駈道（吉野山～本宮大社）

紀州の自然は、その美しさと手つかずの景観で私たちを魅了する。熊野古道集中山行において岐阜支部は、大峯奥駈道の最後を飾る「玉置神社から大斎原」を企画した。岐阜支部ではGWに、5日間をかけ

て私を含めた男性4名と女性単独の2チームが大峯奥駈道を縦走し、今回は再度その最終日の行程をたどることとなった。縦走時は5日をかけ山上ヶ岳、弥山、八経ヶ岳、釈迦ヶ岳を越え、南奥駈の山々を経て玉置山、そして大斎原へと至った。疲労困憊の縦走の終点で「また必ず来たくなるよ」と新宮山彦ぐるーぷの皆さんの言葉に苦笑いで応えたが、2週間後にまたこのルートを歩くこととなったのは、何かの縁だろう。

山行の前日に移動し、玉置神社と玉置山への参詣と登頂を済ませた。玉置神社は熊野三山の奥宮であり、その歴史と伝説に彩られた

奥駈道のフィナーレは熊野川を徒渉して大斎原へ

社は荘厳さと威圧感に満ちている。東海支部の皆さんとしばし歓談の後、岐阜支部は駐車場でテント泊、許可をいただき宴会を始める。夜中には満天の星空に息を呑んだ。

3時30分起床し、行動開始。大斎原に14時までに到着する必要があり、急ぎ足での出発となる。玉置神社からは逆峰となるため、十番靡から一番へと順に数字を下げる。下り基調とはいえ全長18㎞、累積標高差は1200mとなるため、侮れない行程だ。縦走最終日に「まだかまだか」と大斎原にたどり着いたのを思い出す。

玉置神社からしばらく林道を進むと玉置辻、ここで東京多摩支部

熊野本宮大社の旧社地・大斎原に集合した参加者一同

の皆さんとお会いした。その後、このルート最大の登りである大森山の登りにかかる。鋭気満々の本日は足取り軽く、力強く登る。木々の間から透けて目に入るオレンジの朝日が眩しい。

大森山を経て五大尊、大黒天神を越えていく。このあたりは急登と急な下りの連続で気が抜けない。五大尊の山頂手前にある七番靡の行場の趣が良い。右手に熊野川の流れが見て取れるようになり、足取りも軽くなる。

山在峠では新宮山彦ぐるーぷが準備してくれたエイド・ステーションで温かいもてなしを受けた。ロングトレイルの魅力を知り尽くした皆さんとの話は、なんとも楽しい。また、大峯南部整備の大変なご苦労に脱帽するばかりだ。

吹越峠を越え、残り半分。途中の展望台からは大斎原の鳥居を見下ろすことができる。縦走時には震えるような感動を覚えた場所だ。七越峰を越えるとひと息で熊野川畔、大斎原の対岸に到着する。熊野の青い流れを望み、眼前に広がる河原の景色が美しい。裸足になり、仲間と一緒に川を渡る爽快さも素敵だ。大斎原到着は11時30分、最も遅く着くだろうと言われた大峯チームが一番乗りだった。その後は車の回収を行ない、本宮大社へと参拝、山行を終えた。

《熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し、すぐれて山きびし、馬にて参れば苦行ならず、空より参らむ、羽賜べ若王子》『梁塵秘抄』の一首のとおり、大峯奥駈道に限らず、熊野詣では歩くことが鍵なのだろう。長い距離を歩いてこそ（修行としての）価値あり、と思わされる今回と前回の山行であった。

翌日は、那智大社・速玉大社を巡り、2日で熊野三山詣で、なんとも縁起良い。すばらしい企画をありがとうございました。

（岐阜支部　東明裕）

◆集中山行を終えて

はるばる遠い所から参加され、頑張って歩かれた皆さん、手弁当でいろいろ苦労もしながら一生懸命働いてくれたスタッフの皆さん、奥駈に関して様々な情報や便宜を提供してくれた新宮山彦ぐるーぷの皆さんには、この場を借りて心からの御礼を申し上げたい。

（全国山岳古道調査ＰＴ一同）

REPORT

第37回全国支部懇談会を神奈川県平塚市で開催

神奈川支部事務局長　永井泰樹

２０２４年５月25日㈯・26日㈰の２日間において、第37回全国支部懇談会が神奈川支部主管の下、神奈川県平塚市で開催された。全国から24支部の方々が集まり、合計１３４名の参加人数となった。

第１日は、グランドホテル神奈中平塚にて受付を済ませた後、チャーター・バスで湘南平に向かう。ここには、日本山岳会初代会長となる小島烏水とともに、登山家として初めて槍ヶ岳に登った岡野金次郎の顕彰碑が立っている。今回、この顕彰碑の前で神奈川支部主催による「第１回岡野金次郎碑前祭」を開催した（岡野金次郎ならびに碑前祭については別稿を参照）。

碑前祭を終えてホテルに戻って来た後、恒例の懇談会が開催された。神奈川支部・込田伸夫支部長の歓迎挨拶から始まり、尾上昇元会長の乾杯のご発声の後、和気藹々（あいあい）と懇談会は進行した。テーブル奥には各支部から贈られた日本酒の瓶が30本近く並んだ。神奈川支部も「箱根山」「松みどり」「昇龍蓬莱」という地酒を３本持ち込んだのだが、日本酒党の会員が多いせいか、入れ替わりに会員がやって来ては、30本近い酒瓶の酒が見る見るうちに減っていく状況だった。

会も後半となったところで、まず来週開催予定の第78回ウェストン祭について東英樹・信濃支部長から紹介があった。次に全国支部懇談会に関わる宮崎紘一・支部事業委員長の挨拶や、後藤正弘・越後支部長による高頭祭と弥彦山たいまつ登山祭、およびＪＡＣ協賛アジア山岳連盟（ＵＡＡＡ）30周年記念事業の式典・祝賀会の参加案内の説明がなされた。最後に関西支部・小黒節郎事務局長から次回全国支部懇談会は、25年10月26日㈰・27日㈪に大阪ガーデンパレスにて、関西支部設立90周年式典を含め実施されることが発表され、その後、締めの言葉をいただき中締めとなった。

第２日の朝、Ａコースの三浦アルプス、Ｂコースの鎌倉ハイキング、Ｃコース（自由行動）ごとに朝食時間帯を分けて、次々とコース別にホテルを出発する。

Ａコースの三浦アルプスは、神奈川県の三浦半島を東西に横断するような山稜で、葉山町、逗子市、横須賀市の境界エリアに位置している。標高は２００ｍ程度の低山だが、アップダウンが多く累積高度差は約８００ｍ。また、途中、横浜横須賀道路（有料道路）を陸橋でまたぐだけで、それ以外は一般道路を一度も横断することなく縦走できるコースとなっている。今回、前半組28名、後半組26名（各々神奈川支部スタッフ含む）に分け、さらに各組を３班に分けて出発した。

平塚から東海道線に乗り、大船にて横須賀線に乗り換え逗子にて下車。路線バスにまず前半組が乗車し、後半組は15分後のバスに乗車する。ここから先、前半組と後半組は同じコースにおいて時間を開けて移動していくことになる。風早橋でバスから降り、準備を整えた後、登山開始となった。

バス通りの国道１３４号からすぐ離れ、樹林帯を登っていく。やがて視界が広がる登りになると、仙元山（１１８ｍ）頂上に到着する。ここは西側の景色が広がる展望地なのだが、残念ながら富士山や箱根の山並みは雲に隠れてしまい、今回は手前の江ノ島と相模湾、および眼下に広がる葉山の街並みだけの光景となった。

その後は、40段超の階段を下った後、すぐに２００段超の登り階段となるといった、三浦アルプスの名物、アップダウンの縦走が始まる。視界が広がることはなく、樹林帯の中をひたすら我慢強く進む。「大桜」という文字どおり山桜の大木のある小ピークで前半組がランチしている前を通過する。このコースでは、Ａコース全員が同じ場

全国から134名もの参加者があった懇談会のにぎわい

所で昼食をとれるスペースがなかったので、あらかじめこのあたりの小ピークなどで組別に食事をとることにしていた。後半組はさらに30分歩き、視界が広がる送電鉄塔下でランチタイムとした。送電鉄塔下では日陰が少なく暑いかと思われたが、涼しい風が吹き、予想以上に快適なランチタイムとなった。ここで前半組が通過するのを見届ける。

送電鉄塔後はアップダウンが緩やかになり、乳頭山（２０２ｍ）頂上に到着。頂上からは横須賀の街並みや東京湾が見渡せた。頂上を後にして急な下りを慎重に通過し、横浜横須賀道路を渡り、田浦梅の里に到着。ここは、開花シーズンになると約２０００本の梅が咲き誇り、「かながわ花の名所１００選」にも選ばれた場所となっている。ちょうど前半組が出発していくところで、入れ替わるように後半組が休憩となった。

深緑の梅林を通り過ぎ、尾根を下っていく。梅の里から30分後、無事ＪＲ田浦駅に到着。ここで解散となった。

緑いっぱいの田浦梅の里からゴールに向かうＡコースの一行

源氏山公園の頼朝像の前で記念写真に収まるＢコースの参加者

一方、Ｂコースの鎌倉ハイキングは、葛原岡（くずはらがおか）・大仏ハイキングコースを大仏側から入り、源氏山公園からは葛原岡方面に向かわず化粧坂（けはいざか）を下り、海蔵寺、岩船地蔵堂、亀ヶ谷切通（かめがやつきりどおし）の一部、寿福寺を経由して鎌倉駅に出るコースである。今回、前半組24名、後半組20名（各々神奈川支部スタッフ含む）に分け、さらに各組を２班に分けて出発した。

平塚から東海道線に乗り、大船で横須賀線に乗り換えた後、さらに鎌倉で江ノ電に乗り換え長谷にて下車。ここが今回のスタート地点となる。

最初に大仏（高徳院）を見物し、その後、ハイキングコースに向かう。トンネル手前の階段を登り、標高差45ｍの高度を一気に稼ぐ。稜線に出てちょうど大仏の裏手あたりで小休止。ここからは小さなアップダウンを繰り返し、やがて右手の視界が開け、逗子マリーナや和賀江島（かえじま）（人工島）が眺望できた。このあたりから舗装路となり、民家が現われる。高台を進んでいくと、分岐が多いためか道標が目立つ道を進み、源氏山公園の源頼朝像の前に到着。少し早いがここで昼食とした。

その後、化粧坂を慎重に下り、花の寺として有名な海蔵寺に向かう。今回はマツバボタンやイワタバコ、白のカラーなどの花が見られた。海蔵寺から来た道を戻り、頼朝・政子の息女・大姫を弔って建てられた岩船地蔵堂や亀ヶ谷切通、寿福寺などに寄り道しながら鎌倉駅に到着し、解散となった。

最後に、今回参加された皆様には窮屈なタイム・スケジュールに対しご協力いただけましたこと、並びに橋本しをり会長をはじめ本部の方々にもいろいろお世話になりましたこと、改めて篤く御礼申し上げます。全国支部懇談会は、全国の会員の方々と親交を深める意味でも大変ありがたいイベントであり、今回初めて開催する側に立ち、支部内の結束力を高める面でも効果的だと思えました。日本山岳会の活力向上の一環として、このイベントが継続されることを祈っております。

創立120周年記念事業■引き継がれる山岳祭5

岡野金次郎碑前祭（5月25日）

神奈川支部　砂田定夫

今年は近代登山の先駆者、岡野金次郎（1874～1958）の生誕150年目に当たる。5月25日㈯の午後、岡野の顕彰碑がある湘南平（平塚市高麗山公園）において、第1回碑前祭が神奈川支部主催の下、挙行された。第37回全国支部懇談会との同時開催となり、全国から130余名の会員が参集しての開催だった。

この顕彰碑は、平塚市議会で文化事業として決議され、昭和36（1961）年11月13日に建立された。当初、遺族は「父の意思にそぐわない」として同意しなかったが、市議会の熱心な説得により承諾したという。式典は神奈川支部の早川正志副支部長の司会により進められ、込田伸夫支部長の挨拶に始まり、来賓として落合克宏・平塚市長、橋本しをり・日本山岳会会長の挨拶、岡野家ご子孫代表として岡野眞氏（岡野金次郎の孫）から挨拶をいただいた。

湘南平に立つ岡野金次郎の顕彰碑

その後、砂田定夫会員による岡野の功績紹介に続いて、岡野の盟友・小島烏水のご子孫を代表して相良嘉洋氏（小島烏水の曾孫）の挨拶があった。高橋あかね会員の演奏するフルートの音色が湘南の空に静かに流れた後、「引き継がれる山岳祭」プロジェクトの坂井広志リーダーによるスピーチで締め括られた。

岡野の功績は案外知られていないが、岡野の活躍がなければ日本山岳会の誕生は何年遅れたかしれないと言われる。岡野と小島による明治35（1902）年の近代登山史上画期的な槍ヶ岳登頂は、事前に小島の両親の反対があって中止されそうになったが、岡野の計略で実施できたという。

その後、偶然その著書を見つけたことからW・ウェストンとの交友の足掛かりをつくったのは、岡野の積極的な行動だった。日本の勇敢な青年たちが未知のルートをたどって槍ヶ岳へ登ったことに感銘を受けたウェストンは、日本にアルパイン・クラブを設立することを強く勧めたのである。

日本山岳会の創立は小島を中心に進められたが、岡野は発起人に名を連ねることはなかった。しかし、当初はウェストンの講演に際し小島と岡野が分担して通訳を務めるなど、山岳会の活動を支えたが、小島が転勤で渡米した後、退会している。質実・素朴な岡野は次第に名士扱いされていくのが苦痛だったようで、我が道をゆく人生を歩むようになる。しかし、生涯日本山岳会の応援者であった。

たとえば、昭和11（1936）年の立大によるナンダ・コットの講演を山岳会が開催したときに出席し、幹部だった小島や高頭仁兵衛と面談したり、木暮理太郎や槇有恒に紹介されたりした。阿佐ヶ谷の小島宅へは何度か訪ね、小島が病気から快復したときは万歳を叫んだという。小島が死去した後、『山岳』49年1号が「小島烏水記念号」として発行されたが、岡野は「小島と私」（三男・満に口述筆記させた）を寄稿している。

昭和28（1953）年、マナスル講演会に出席のため、縁者の望月達夫宅を訪れて1泊し、翌日、山岳会ルームを訪れて高野鷹蔵、武田久吉、加賀正太郎、近藤茂吉、冠松次郎ら長老たちと会って懐旧談を交わした。名誉会員に推挙の話もあったが、果たされないうちに交通事故に遭い、84年の生涯を閉じた。広く内外の山に登り、愛し続けた生粋の山男であった。

湘南平展望台前に集合した碑前祭参加者一同

支部長が代りました

京都・滋賀支部長　幣内規男さん

２０２４年４月６日の第39回日本山岳会京都・滋賀支部総会にて急遽、支部長に推薦され、本部理事会より支部長に任命されました。私は、日本山岳会に入会して早や49年になる〝古参〟と言われる会員ですが、まさかこんな大役が回ってくるとは思いもしませんでした。しかし、お受けしたからには一所懸命頑張る所存です。

私は１９４５年８月５日生まれです。太平洋戦争の末期に大阪大空襲が始まり、６回目の堺大空襲で、私は母のお腹にいました。被災した母は３歳の姉の手を引いて、リヤカーに少ない家財を乗せ京都の実家に疎開しました。途中の山崎で見ず知らずの農家の人が、疲弊した母と姉の姿を見て親切にしてくださったことを、母は他界するまで語っていました。戦争の悲劇が、現在も世界のどこかで繰り返されていることに憂いを覚えます。登山は平和でないとできません。

京都・滋賀支部長　幣内規男さん

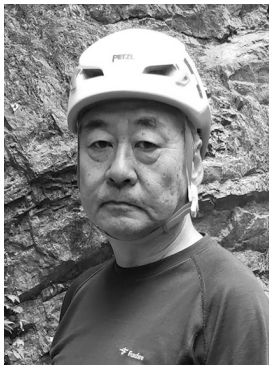
私を日本山岳会に入会するよう勧めてくださったのは、マナスルに世界初登頂された今西壽雄さんでした。当時は関西支部に所属して、休暇は山登りで消えてしまいました。同僚からは「山はそんなに楽しいか」なんて言われながらも、日本全国の山に登ることができました。良き先輩に導かれながら登りました。登山の技術は上がりませんでしたが、酒を酌み交わす技量は上がりました。この技量は、会社生活では一番役に立ちました。ヒマラヤの未踏峰もまだ残っており、数ヶ国での海外登山を楽しむ良き時代も経験させていただきました。

日本山岳会は、長い歴史を持ったすばらしい全国組織の山岳会だと思っております。良き先輩の指導を糧に一緒に登って、話を聞き、語り合える会として、みんなで発展させたいと思います。日本山岳会のクラブライフは、平等にして楽しいものです。

千葉支部長　三田博さん

生まれは神奈川県で、小・中学校の遠足では弘法山や箱根の金時山に登りました。私が山を始めたのは遅く50歳になってからで、いわゆる中高年からの再スタートです。学生時代にサークルで少し登山を経験しましたが、ハイキング・レベルのものだったので身に付いたものは特にありません。昔取った杵柄もないので、技術を習得するには素直に人の言うことが聞けて、逆に良かったかもしれません。

日本山岳会へは、妻の知人に誘われ２０１５年に入会しました。千葉支部に入ってまだ９年ですが、入った当時、ずいぶん高齢者の多い山岳会だな、と思いました。18年２月に事務局長に就任。若返りを図らなければ支部はいずれ消滅してしまう、と考えていました。


千葉支部長　三田博さん

19年４月からは、松田宏也前支部長とコンビを組んで、いろいろと支部活性化を図る事業をやってきました。まず、支部山行の数を増やし、様々なレベルに応じて支部会員が参加しやすい環境をつくってきました。登山ばかりでなく、街歩きウォーキング、自然観察会、スケッチなどリーダーを買って出てくれる人がいて、本当に日本山岳会は多士済々だな、と感じることが多いです。最近では、その道の達人会員のお陰で「きのこ山行」「山菜山行」など、山の恵みを感じられるイベントも支部山行としてやっています。

「若者の山岳会離れ」などと言われることが多いですが、雪山やクライミング、沢登りの技術を習得し、仲間を見つけるという山岳会の機能は失われていません。若手を呼び込むためにも、ＹＯＵＴＨ千葉を立ち上げることにしました。同時に、高齢者でも若手でもないＹＯＵＴＨ卒業後の60代会員が、大いに活躍できる場も必要だとも思っています。

支部設立時の趣旨である「より楽しい、より豊かなＪＡＣクラブライフを目指し、新しい出会いの場をつくる」という初心を忘れず活動していきたいと思っています。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

⑲『山のパンセ』（串田孫一著・実業之日本社）

狩野芳郎

昭和32（1957）年初版発行

戦後の１９５３年に英国隊がエベレストに初登頂、１９５６年には日本山岳会隊がマナスル初登頂に成功し、日本国内は空前の登山ブームになっていく。本書はそんな時代の１９５７年に出版されて以来の、超ロングセラーである。

串田孫一の山との関わりは、１９２８年、暁星中学に入学した冬に、吾妻山・五色ロッジでの滞在で槇有恒とスキーとの出会いに始まる。吹雪の中の山の厳しさを体験し、その後多くの影響を受けて交流が続く。また、『一日二日山の旅』の著者・河田槙（みき）や詩人の尾崎喜八と出会い、２年生になると烏帽子岳から三俣蓮華岳・槍ヶ岳・穂高岳と縦走し、さらに乗鞍岳、剱岳と山行日数が多くなる。

と同時に、山の紀行集を書き留めている。東京高等学校山岳部の時代には、１９３４年冬に立見辰雄、渡辺兵力らと堅炭岩（かたずみ）ＫⅢ峰冬季初登攀を記録に残しているが、大学に入ると登山道具も処分して、すっかり登山から離れた。そして、東京帝国大学文学部哲学科で師となる渡辺一夫に出会い、哲学・思想関係の著作を多数刊行し、パスカルやモンテーニュ研究の第一人者として知られるようになる。

１９５０年に東京外国語大学に迎えられ、創設された山岳部の初代部長となった。その年の５月に谷川岳で山岳部の第１回合宿があり、当時学生の三宅修をはじめとした若い人との山行や、依頼講演に合わせた山行など頻繁に山を歩くようになっていく。

丹念に書き留めていた山行記録を戦災で失い、戦前の山や疎開に関する随想をまとめた『若き日の山』の２年後、１９５７年に戦後の山を中心とした『山のパンセ』が発行され、さらに翌年には尾崎喜八らと山に関わる広範囲の文化を取り上げた文芸誌『アルプ』を創刊し、戦後の新しい山の文学の時代が幕を開けたと言って良いだろう。そこには戦前の激しい登山とは全く別の視点から、登山の行為を見詰める姿があった。

「山での行為と思考」では、若いころの激しい登山行為を、動的な工作人ホモ・ファベルに当てはめ、静的な叡智人ホモ・サピエンスを理想として山を離れたことを述懐する。ところが、山での行為と思考とが一つになる場合があり、秘かにそういう機会に巡り合うことを願って山へ出かけているような気さえしてきた、と述べている。「雪の森の一夜」や「富士山」などにはその機会に巡り合った嬉しさが描かれ、山の経験が豊富な読者に共感を持たせるが、さらに、そこには自然と一体になっている幸せがあふれている。

この自然と向き合う姿は、前後して書き始めた『博物誌』に見られる自然に対する細かな観察眼と畏敬の念により、山で出会う小鳥の声や草花、そして、雲の流れや岩石を通して全編に様々な形で描かれて、南アルプスでのビバークや高原や山村を巡る山旅を豊かなものにし、時には「岩の沈黙」のように思索の対象として向き合い、広く読者を魅了する。

「島々谷の夜」の世界にあこがれ、秋の大型台風一過に合わせて家を出て、紅葉の絨毯（じゅうたん）になった林道を歩いた。落ち葉のモザイクを踏み締めて岩魚留小屋にたどり着き、唯一の客に岩魚酒をふるまってもらった記憶は遠い昔になったが、今読み返すと、当時の登山ブームと異なる世界に共感してしまうのは、果たして私だけだろうか。

文庫版は、１９９５年に自選により山の随想や紀行的なもの、山を巡る思索に整理された岩波文庫（税込み９６８円）が発行され、２０１３年には、実業之日本社の１９７２年版を底本としてヤマケイ文庫（税込み１２１０円、全91編を収録）が発行され、いずれも手に入れることができる。

（図書委員会委員）

⑳『アルプス登攀記』

（E・ウィンパー著／岩波書店）

森田栄二

世界の山岳史に輝く本書の著者エドワード・ウィンパーは1840年、英国・ロンドンに生まれた。F・スマイスの『ウィンパー伝』によると、父親が挿絵画家で若くして家業を継いだが、学業は全て優秀な成績だったという。登山の経験はなかったが、北極探検が夢だった。ドーフィネ地方の風景挿絵を依頼されたことが契機で1860年に20歳で渡欧し、以後6年間にわたるアルプスの山々、とりわけマッターホルンの初登頂に向けた執念の闘いの記録が、この『アルプス登攀記』である。

昭和11（1936）年初版発行

翌年にはモン・ペルヴーを初登頂して自信を深め、マッターホルンには当初、イタリア側の南西稜をカレルのガイドで試登を重ねたが、登頂は困難を極めた。そこで彼はアルプスの山々を彷徨しながら登山への意欲と技術を高めていき、後年、モン・ドランやグランド・ジョラス（西峰）、エギーユ・ヴェルトなどの名峰初登頂を次々と果たす。

筆者が本書を初めて読んだときは高校生で、欧州アルプスの知識や地理勘が全くなく、難儀した。大学では、学部は違ったがエルゾーグの訳書で有名な近藤等先生がいて、仏文学の教授のかたわら早大山岳部の部長も一時期務めておられた。先生はレビュファの友人で、アルプス登攀に関して当時、日本で最も精通したひとりであった。案内書の自著も多く、筆者はそれらを参考に本書を読んで、多少なりともアルプスの山々の地理や歴史を理解できたのを憶えている。

本書で特に印象に残るのは、ウィンパー自身の作による美しい木版画の挿絵で、読者に鮮明な情景を思い浮かばせる。特にテオドール峠から眺めたマッターホルンの全景、下山時の事故後に見た天空に浮かぶ十字架は圧巻の迫力で、心に残る。

自然や科学技術に関する記述も数多く、彼の単なる登山家以上の博識と進取の精神に驚く。乱獲により生息数が激減したアイベックスの保護の必要性を論じたり、当時から縮小後退していたアルプスの氷河について最新学説を紹介し、自身の実地観察も交えて詳細に論述している。また、山岳鉄道の建設やトンネル掘削に関しての詳述など、時代は違えど現代の日本の問題に通じる論点も多く興味深い。

いよいよ〝魔の山〟マッターホルンの初登頂である。数多くの試登と失敗から地層が逆層で落石も多いイタリア側よりも、一見斜度が厳しく見えるスイス側の東北（ヘルンリ）稜の方が順層で、登りやすいことにウィンパーは気付く。しかし、信頼できるガイドを確保できず、イタリア側からの登頂にこだわるカレルに協力を求めるが断られる。仕方なくツェルマットに戻ると、ハドソン氏やダグラス卿とガイドのクロら7人で即席のパーティを組み、登頂を目指した。

好天に恵まれて登攀は思いのほか順調に進み、ついに頂上を極めた。時に1865年7月14日午後1時40分、正にアルプス黄金時代に冠たる頂点を踏んだのだ。だが、悲劇は下山時に起こり、4名が滑落して落命する。魔の山は征服されたが服従はせず、以後も多くの犠牲者を出す。

登頂の栄光から一転してウィンパーは世間やタイムズ誌などから猛烈な批判に曝されて、アルプスから去る。彼は特に反論しなかったが、英国山岳会会長ウィルスの要請もあり本書を執筆する。

原書は版を重ねて世界中の人々に読まれ、マッターホルン初登頂の偉業と悲劇にも様々な評価がなされている。小島烏水は戦後の日本山岳会の復興に際し、彼への敬意を込めて次の言葉を残している。

《私供は、足並みを揃えてかのマッタアホルンの勇者ウイムパアの、山登りの時の歩き方のやうに、歩々重く、併しながら確かに、徐々に故郷の山へ歸るべきである。》

岩波文庫版（上・下　浦松佐美太郎訳）は1936年初版発行。新版は1966年発行（税込み836円）。書籍は『完訳　アルプス登攀記』（新島義昭訳、森林書房、1980年初版発行）がある。

（図書委員会委員）

REPORT

コーカサス山麓に桜を植えよう ジョージアの人々と文化交流を

コーカサスの桜プロジェクト

これは創立120周年記念事業の一環として2025年春に、ジョージア（旧グルジア）のコーカサス山麓の町メスティアに桜の苗木の植樹を行ない、それを機に日本とジョージアの人々との文化交流を促進しようとする計画です。直近で2つのイベントを行ないましたので、報告します。

「コーカサスの魅力とワインの夕べ」を開催

24年2月29日の夕刻、市ヶ谷において、駐日ジョージア大使ティムラズ レジャバ氏をお招きして、大使による講演会とワインの夕べを開催しました。大使により写真、動画を用いてジョージアとコーカサスの魅力を紹介していただきました。当日の会場はほぼ満席となり、日本山岳会の会報とホームページによる募集だったにもかかわらず、参加者60名のうち40名は本会会員以外の方でした。

ワインの夕べで講演するレジャバ大使

大使による楽しい講演の後、日本酒類販売㈱の協力により格安で提供された3種類のジョージア・ワインを、参加者で和やかに満喫しました。ジョージアは世界最古のワインの生産地とも言われ、今も良質のワインを多数生産しています。

（鈴木祐二）

ジョージア事前調査旅行

25年春のメスティアでの桜の植栽地視察と準備のため、会員3名で本年3月末の9日間、ジョージアを訪問しました。また、現地参加でJICA青年海外協力隊の山下真生氏が調査、交渉に加わってくれました。

首都トビリシでは、在ジョージア日本大使館を訪れたのち、ジョージア国立植物園を訪問しました。桜の植樹をするメスティアは高地で、冬には低温になるので、苗木を保護するために温暖なトビリシの国立植物園で1年間預かってもらう交渉をしていました。

世界遺産にもなっているメスティアでは市長との会議を行ない、市内の桜の苗の植栽候補地を視察しました。植栽地の候補としては3ヶ所準備されていて、各場所に3本の桜を植える計画です。寒冷な気候と土壌のために苗木が育たないリスクを軽減するため、3ヶ所に分散して植樹することを予定しています。メスティア市では、私たちのため夕食に大歓迎会を開催していただけました。

桜の苗木の移送について

3月末に調査旅行を行なった理由は、苗木は土のない状態でないと輸出できないので、苗木が眠っている冬の間に行なう必要があり、3月末が、春になる前の最後のタイミングでした。

日本の桜の苗木をジョージアに移送するために、植物検疫等の書類作成などに3ヶ月を要し、やっとのことで両国の許可を得たのが3月半ばでした。ところが、空輸の予定が大幅に遅れ、私たちの帰国直後に到着することになり困りました。なんとかJICAと青年海外協力隊員の方に空港での受け取りと搬送をしてもらい、国立植物園で直ちにポッドに植え替えられた10本の苗木は元気ですとの報告を受け、安堵したところです。

ジョージアに到着した桜の苗木

来年の桜の植樹は、メスティア市のアドバイスに従って5月後半に行なう予定です。その際には、日本山岳会会員と一般の方々とで、桜の植樹に参加する旅行を企画しますので、ぜひご参加ください。また、地元登山者との接点もできましたので、希望者があれば、コーカサスの山への登山隊も派遣したいと考えています。

（吉川正幸）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

東九州支部

鹿児島天測点と子午線標のある八重山の楽しい探索山行

3月23～24日にかけて行なった、鹿児島県の八重山天測点の子午線標探索行の報告。

23日5時、別府湾サービスエリアに「こぎこぎ倶楽部」の16名が集合。途中、北熊本と桜島のSAでトイレ休憩などをして10時20分、西保町の八重山子午線標入り口に到着した。雨である。

八重山の天測点を囲む参加者

10時40分、探索を開始するも入り口が分からない。先発隊が上部でルート工作していたとき、待っていた我々の前に直径15㎝、長さ6～7mほどの枯れたモウソウ竹が滑り落ちてきた。当たれば大怪我であった。登山時は上にいる者も下にいる者も要注意である。

高度差40m、距離150mの斜面を雨中のヤブこぎ二十数分、11時10分に小ピークの北側斜面で子午線標を発見した。写真を撮って下山し、11時50分、次の八重山に向かって出発。絶え間なく降り続く雨の中、13時に八重山登山口を出発。緩いアップダウンの続く長い道のりである。13時40分、三角点（679m）に着く。そこから少し南に離れた木立の中に八角形の天測点があった。まずは皆で写真撮影。その後少し先にあるという山頂へ向かう。

平坦な山頂部で、広い展望が得られるように木立が切り開かれているが、雨と霧で視界が悪く、早々に下山開始。15時に登山口着。

下山後はお楽しみの諏訪温泉に向かう。温泉は泉質が良いことで有名だが、給湯ポンプが故障とのことで、近くの市営温泉施設「湯の山館」の入湯券をもらって入浴した。それでも温泉の質の良さを実感する。夜は深草さんの差入れ、「知恵美人」を堪能。二次会では飯田さんの用意された、飲んだことのない「電気ブラン」をいただいた。

24日も雨だが、せっかく鹿児島に来たのだから九州百名山の冠岳（516m）に登ることになった。7時40分に宿を出発。当初計画では徐福像から登るはずであったが、降りしきる雨のため、山頂直下の駐車場から最短距離で登ることとした。20分余りの階段道だが、足場が悪い。9時過ぎに山頂に到着したものの視界ゼロ、記念写真を撮って早々に下山した。

9時40分、登山口の駐車場から次の予定地、蘭牟田池へ向けて出発。10時50分、池のほとりの「生態系保存資料館・アクアイム」前の駐車場に着く。横にはちょうどいい具合に、椅子とテーブルのそろった大きな東屋がある。時刻はまだ早いがここでランチタイムとした。壁がないのでときおり雨風が吹き抜けるが何もないよりいい。

昼食後、二手に分かれて行動開始。1班11名は湖畔の片城山（509m）に登り、2班は自由に蘭牟田池を探索した。周囲約4㎞の蘭牟田池は、ラムサール条約に登録され、泥炭植物群落は天然記念物にも指定されている。雨にかすむいくつもの浮島と、蘭草の湿地の風情はすばらしい。登山組も帰って

寄附金および助成金などの受入報告（4月まで）

寄附者など	受入金額など（単位千円）	寄附の目的、その他
後藤　充会員	20	新入会員援助
吉川正幸会員	200	コーカサス桜プロジェクト寄附
京王電鉄株式会社	1,000	高尾の森づくりの会活動への寄附
北星印刷株式会社	200	山形支部事業に対する寄附

来て、全員そろったところで午後1時に解散として各々車で帰途につく。

リーダー飯田さんの体力・知力・指導力に感心させられる。また、清水さんの会計のスムーズさ、そして、皆さんの人柄によって楽しく山遊びができたことに感謝します。

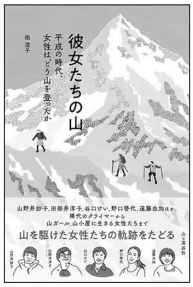
（櫻井依里）

＊天測点、子午線標＝天測点はこの上に子午線儀を載せて天文測量を行なう。子午線標は正確な方位を定めるためのもので、両者は対で設置されている。（編集部注）

図書紹介

彼女たちの山

柏 澄子著



2023年3月
山と溪谷社
四六判　256ページ
1700円＋税

ガイドブックや山の伝記が並ぶ書店の山コーナー。その中で、パッとした色彩を放っているのが本書『彼女たちの山』である。カバーイラストの作者は柿崎サラさんという方で、淡い色を鮮やかに描き、細かいタッチで雄大な絵を描く素敵なイラストレーターである。

それでは本書の内容について触れていこう。著者の柏澄子さんは『山の突然死』や『山歩きはなぜ体にいいのか』を著わしている山岳ガイド、フリーライターである。本書は月刊誌『山と溪谷』で2020年4月から12月号まで連載された「平成を登った女性たち」に加筆修正を加えた一冊である。

第一章、第二章からなり、第一章では、誰もが知るレジェンドたちは、いかに山に向き合ってきたか、というエピソード。第二章で

令和6年度 第14回登山教室指導者養成講習会案内

支部の登山教室・リーダー育成事業援助として、登山のすばらしさと安全な登山を指導する会員を育成し、支部山行の安全と充実を図り、支部のいっそうの発展を目的とする指導者養成講習会です。

実技講習・講師を囲む懇親会は、講師や参加各支部の皆さん方の交流の場としてご活用ください。

◆主催　公益社団法人日本山岳会 支部事業委員会
◆後援　公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団
◆日時　令和6年9月21日㈯12時30分集合、机上講習22日㈰　東篭ノ登山、水ノ塔山周辺にて実技講習予定
◆場所　安藤百福記念 アウトドアアクティビティセンター（略称：安藤百福センター＝長野県小諸市大久保1100　JR小諸駅よりタクシー10分）
◆参加費　8000円（現地交通費、宿泊費・食事2食・資料代を含む）参加費は受付時に集金。
◆講習内容
机上講習＝①リーダーのチーム運営と危機管理　②緊急時の対応　＊①②とも講師は平木順氏（日本山岳ガイド協会 危急時対応技術担当委員）
実技講習＝前日の講習内容の実践を行なう　講師は平木順氏ほか
◆参加資格　日本山岳会会員で支部山行・登山教室のリーダーを目指す者および山岳保険に加入している者
◆募集人数　20名
◆締切り日　令和6年8月31日㈯　定員になり次第締切ります。
◆申込み方法　7月中旬、各支部長宛に送付する実施要項を確認のうえ、添付の申込み書に記入してメールで左記アドレスにお送りください。
◆申込み先　支部事業委員会・中村哲也　✉jac-shibu@jac.or.jp
＊なお、2025年冬の指導者講習会は、2月15日㈯～16日㈰に安藤百福センターで予定しています。詳細については、本年11月に案内いたします。

は、なかなか表には出てこない女性登山者にスポットを当て、まさに「平成の時代」いかに山に登ってきたか、ということが書かれている。

第一章に登場するのは、山野井妙子、田部井淳子、谷口けい、野口啓代、遠藤由加。輝かしい功績が語られることが多い彼女たちだが、作者の目線からは、彼女たちの日常生活が語られる。食べることなど、日常生活を大切にしているエピソードや家族に迷惑をかけないように、という気遣いがあり、登るための環境づくりを大切にしていたことが分かる。こういった努力によって偉業を達成していたのだと、彼女たちに親しみを感じるであろう。彼女らと親交がある著者だからこそ、導き出せたエピソードだ。

第二章では、山ガール、山小屋の女性たち、山岳ガイド、大学山岳部、スポーツクライミング、アルパインクライミングとテーマが分かれている。表に出て活動している人ばかりではないだろうから、こうして彼女たちのエピソードを知ることができるのは貴重な機会である。

彼女たちも立場はそれぞれであるが、悩みや葛藤を抱えながらも自身を受け入れ、山と向き合っている。悩みや葛藤の原因は、男女の差であったり、周囲に女性登山者が少ないことからの孤独感であったり様々だが、皆それを受け入れ、それを乗り越えて今の生活につなげている。今山に登っている人も、かつて山に登っていた人も、彼女らの生き方に勇気をもらい、励まされることだろう。

山ガールの章で著者が「山ガールブームが登山界にもたらした大きなものの一つは、男女ともに新しい登山者層が広がり、以前は一部の人のもの、ととらえられがちだった登山に多様性が生まれたことだろう。」と考察しているが、確かに週末の京王線に乗ると、高尾山へ向かう若い男女グループを大勢見掛け、登山の裾野が広がっているのだな、と感じる。

特別な人が登っていた山から、それぞれの山になり、みんなの山へ。平成を登った女性たちが、令和の時代へとつないできてくれたのかもしれない。

（豊泉仁美）

第26回「秩父宮記念山岳賞」の推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第26回「秩父宮記念山岳賞」の推薦（他薦に限る）を次のとおり受け付けます。事務局まで資料をご請求ください。本会のホームページを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載しておりますので、推薦要項・所定様式（ダウンロード可能）などをご参照ください。多数のご推薦をお待ちしております。

なお、本賞は公益目的事業でありますから、受賞対象者を本会会員またはグループに限定しておりません。

◎対象分野　登山活動／山岳に関する文化的活動、学術的業績

◎提出先　〒102-0081
東京都千代田区四番地5番4　公益社団法人 日本山岳会　秩父宮記念山岳賞事務局
☎03―３２６１―４４３３
✉jac-room@jac.or.jp

◎締切り　令和6年8月30日（金）

雪のくに移住日記
―ブナの森辺に暮らす

星野秀樹著

2023年10月
信濃毎日新聞社
Ａ５判
2000円＋税

日本で初めての本格的なロングトレイルとして人気が高まりつつある信越トレイル――。そのシンボルとも言える鍋倉山（1289m）の麓、飯山市羽広山（はびろやま）集落に移住した写真家一家5人のフォトエッセイである。

温暖な湘南暮らしから、なぜ好き好んで日本でも指折りの豪雪地帯に引っ越したのか、とよく聞かれることがあると言う。著者は「なぜならそこは雪が深くて、森が近くて。脈々と続く、人の暮らしがあった、から」と綴る。

著者は上越、信越周辺の山や剱岳、黒部川源流エリアの山を主なフィールドとして撮影活動をしているが、２００３年1月、取材で初めてこの地域に足を踏み入れた。以来、数回訪れているが、そこで出会ったのが、「ブナ」と「雪」、そ

れに「暮らし」だった。

05年の厳冬期には、自分の撮影目的でこの豪雪地帯の森へ初めて分け入ったが、雪の多さと美しいブナ林に圧倒され、それ以来、ライフワークとしてこの地に通うようになった。当初はとにかく四季の移ろいを追い求めていたが、やがて森に隣接する「暮らし」の存在にも惹かれるようになった。

ここ鍋倉山に広がる森は、暮らしの背後にある里山だ。だから森を感じて、森で里を感じなければ、この森のことは何も見えてこない、と著者は考えた。「暮らさなければ何も撮れない」と一念発起、15年に移住を決断する。

本書はプロローグの「雪のくにへ」から始まり、「春」「夏」「秋」「冬」の4部構成となっており、山村暮らしで出会った折々のエピソードが、季節感たっぷりの素敵な写真とともに綴られている。最後はエピローグ「雪のくにから」で終わる。

「春」の項では「山菜とソウルフード」が、瑞々しいネマガリタケやミツバアケビ、ワラビの写真とともにいい感じ。「夏」では「ある日、森の中、クマさんに出会った。」で始まる「森でクマが教えてくれたこと」が面白い。「秋」では「何もない森」が読ませる。そして、「冬」では「根雪になる頃」が、しみじみ雪国の暮らしを感じさせてくれる。

それにしても気になるのは子どもたちの反応だが、エピローグで「大人の移住、子供の移住」と題して賛否両論、こもごも述べている。そして、村の子どもたちには親から子どもに多くのことが「伝承」されているが、星野家では「伝承」する暮らしができなかった。「だから、せめてこの本が、子供たちに伝え残したいことについての覚書にでもなれば、と思っている。」と「あとがきで」で綴る。

厳しい暮らしの中にも温かな風が流れている、好ましい写文集である。なお、カバーが面白い仕掛けでリバーシブルになっており、裏返すとグリーン・シーズンのカバーになる。

（節田重節）

会務報告

令和6年度第2回（5月度）理事会議事録

日時　令和6年5月23日㈭　19時00分～21時00分

場所　集会室およびオンライン（Zoom）

【出席者】永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・望月・原田・猿渡・川瀬・池田・久保田各理事、石川監事

【欠席者】橋本会長、佐野監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和5年度決算報告について（南久松）（賛成13、反対0）

2・令和5年度特定資産取り崩しの件（南久松）（賛成13、反対0）

3・令和5年度事業報告について（長島）（賛成13、反対0）

4・山梨支部の支部長交代について（長島）（賛成13、反対0）

5・千葉支部の支部長交代について（長島）（賛成13、反対0）

【協議事項】

1・総会の準備について協議した（長島）

2・支部連絡会について協議した（長島）

3・超党派「山の日」議員連盟総会への対応について協議した（久保田）

4・会報の電子データの利用に関する課題整理について協議した（永田・長島）

5・UAAA長岡大会（国際平和祭）への対応について協議した（桐生・長島）

【報告事項】

1・入会承認報告（橋本）

2・寄附金および助成金受入報告（南久松）

3・支部交付金等未精算残高について（南久松）

4・千葉支部事務局長の交代について（長島）

5・熊本支部事務局長の交代につ

いて（長島）
6・信濃支部事務局長の交代について（長島）
7・四国支部事務局長の交代について（長島）
8・広島支部事務局長の交代について（長島）
9・韓国山岳会のルーム来訪について（飯田）
10・初級者向け登山講習会の実施状況について（平川）
11・熊野古道集中山行についての報告（永田・長島）

【その他】
1・会報「山」5月号の進行について（節田）

ルーム日誌 5月

1日　山行委員会
2日　山岳地理クラブ
7日　記念事業委員会（山岳古道調査）　スケッチクラブ
8日　財務委員会　山想クラブ
　　かっぱの会
9日　常務理事会　YOUTH CLUB委員会　緑爽会
　　九五会
10日　図書委員会

図書受入報告（2024年4, 5月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
井ノ部康之	雪炎：富士山最後の強力伝/ヤマケイ文庫	257p／15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
廣川健太郎	アルパインクライミング ルートガイド：八ヶ岳・南アルプス・谷川岳編	208p／26cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
広渡敬雄	全国・俳枕の旅62選	249p／21cm	東京四季出版	2024	著者寄贈
八木清（訳・写真）	ツンドラの記憶：エスキモーに伝わる古事	112p／21cm	閑人堂	2024	出版社寄贈
石丸謙二郎	山は泊まってみなけりゃ分からない	256p／19cm	敬文舎	2024	出版社寄贈
近藤幸夫	ライチョウ、飛んだ。	280p／20cm	集英社インターナショナル	2024	著者寄贈
クリスチャン・モリエ／柴野邦彦（訳）	シャモニーの谷に生まれて：モンブランが仕事場	272p／20cm	未知谷	2024	訳者寄贈
白水社 編集部（編）	昭和登山への道案内：ベストセラー「日本登山大系」を旅する	204p／19cm	白水社	2024	出版社寄贈
上野健一	ようこそ、山岳と大気がおりなす世界へ	99p／21cm	筑波大学出版会	2024	出版社寄贈
松田敏男	山に抱かれ染まるる刻：松田敏男山の画集	22cm	信濃毎日新聞社	2022	著者寄贈
日本・エクアドル友好合同登山隊プロジェクト	友好合同登山隊2019～2023報告書：～両国の高みを目指して～	68p／30cm	日本・エクアドル友好合同登山隊	2024	発行者寄贈
高澤光雄	北海道の山に貢献された日本山岳会の会員たち：続続編	21p／21cm	高澤光雄(私家版)	2023	著者寄贈
羽根田治	ドキュメント 生還 2：長期遭難からの脱出	247p／19cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
柿木憲二	伊那街道ふるさとの道	243p／22cm	伊那毎日新聞社	1981	購入
福岡山の会（編）	創立九十周年記念誌：写真でつづる90年史	324p／30cm	福岡山の会	2024	発行者寄贈

13日　道のり山の会　アルパインスキークラブ
14日　フォトクラブ
15日　つくも会　三水会
16日　科学委員会　山遊会
17日　自然保護委員会
18日　アルピニズムクラブ
20日　総務委員会
21日　麗山会　沢登り同好会Ⅱ
　　バックカントリークラブ
22日　図書委員会　子どもと登山委員会
23日　理事会　学生部
24日　創立120周年記念事業委員会
27日　アルピニズムクラブ　東京支部設立プロジェクト
28日　00会　アルパインスキークラブ
29日　記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）
30日　支部連絡会
31日　登山講習会

5月来室者　333名

会員異動

物故

岩坪五郎（4643）24・5・23
土屋　満（4667）23・4・6
山崎　徹（4678）15・10・27
小岩清水（6543）24・5・9
町　俊一（6677）24・5・17
波多野三郎（7999）24・1・11
小野勝昭（8199）24・5・23
藤野　薫（9829）24・1・22
小池　潜（10053）23・11・29
内山哲司（14120）24・3・31
シュトゥールートレガー・エリッヒ（15973）24・4・25

退会

重松保宏（8300）
大里祐一（8748）
藤木孝一（9572）
大橋基光（10515）
米田康男（10791）京都・滋賀
神原立児（10821）
菅野三知博（10924）北海道
水野起己（11292）東海
柳原徳太郎（11433）東海
棚橋　靖（11702）
井上　潤（11930）京都・滋賀
宇山紘治（12237）福井
笹本　忠（12999）東京多摩
渡辺　等（13401）越後
白井聰一（13965）
船木上総（14146）北海道
松田拓郎（14254）
田井具世（14347）
征矢三樹（14594）
山崎　洋（16069）静岡
宮永幸男（16169）京都・滋賀
加賀サユリ（16784）東海
村松稜太（16869）京都・滋賀
小日向祐哉（16963）
松井一訓（A0390）北海道
有川浩平（A0542）

令和6年度（前期）「海外登山助成対象登山計画」募集

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

困難を求めての挑戦、オリジナルな発想、斬新な切り口、独自のテーマのある計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。

会員資格やパーティ編成などの条件は問いません。ぜひご応募ください。

●対象　2024年8月1日～2025年1月末に海外の山へ出発する登山隊

●申込み方法

1）所定の様式をJAC事務局にご請求ください。

2）記入後、登山計画書と併せてメールもしくは郵送してください。

＊計画書には目的、対象となる山の名前、標高、位置、行程、メンバーの基本情報、予算など登山計画に必要な事項を網羅してください。対象の山が未踏峰の場合、当該国政府発表の山名、標高を記入してください。

●申込み締切り　2024年6月30日（当日消印有効）

●審査　2024年7月中に審査後、理事会で助成の有無を決定します。

●報告と記録掲載

助成対象となった登山隊は下山後、報告書を提出してください。また、会報「山」や機関誌『山岳』に掲載する記事執筆や、報告会への出席にもご協力ください。

●問合せ・申込み先

日本山岳会事務局

☎ 03－3261-4433（月～金10時～、第1・3・5土10時～）　✉ jac-room@jac.or.jp

件名「海外登山助成対象登山計画送付」

〒102-0081

東京都千代田区四番町5番4 サンビューハイツ四番町

（海外登山助成委員会）

INFORMATION インフォメーション

◆第31回展「心に映る山々」
アルパインフォトクラブ

２０２４年度本展を左記の日程で開催します。国内、国外の山で四季折々に撮影した全紙作品約35点と、山の花などの半切作品約10点を展示します。山を愛する者の感性で、自然の変化の一瞬を捉えた写真表現の意図を感じていただければ幸いです。

なお、10月に高尾５９９ミュージアムにて第30回展の巡回展を予定しています。詳細は改めてご案内いたします。

会期　8月15日㈭～21日㈬　10時～18時　土・日は11時から。最終日は15時終了

会場　ポートレートギャラリー東京都新宿区四谷1-7-12日本写真会館５階　ＪＲ四ツ谷駅・東京メトロ丸ノ内線・南北線　徒歩３分　☎03-3351-3002　URL：http://www.sha-bunkyo.or.jp

問合せ　田口克彦　✉taguchi@mvg.biglobe.ne.jp　☎090-8034-2003　花澤廣巳　✉hnzwa-hirmi@xg8.so-net.ne.jp　☎090-7827-0155

◆日本山岳画協会展―創立88周年記念展覧会―

山を愛し山の絵を描き続けてきた画家たちの集団です。洋画、日本画、版画、水彩画など様々な技法の作家たちが集まっています。過去には文化勲章受章者2名、芸術院会員11名を輩出してきた絵画団体です。

日時　6月30日㈰～7月6日㈯　11～17時、初日は正午から、最終日は16時まで。

会場　東京交通会館Ｂ１　ゴールドサロン（〒100-0006　東京都千代田区有楽町2-10-1　☎03-3215-7933）

問合せ　杉山修（日本山岳画協会代表幹事）☎090-5440-4552

◆舟橋栄子　山岳映像発表会

日時　7月14日㈰　13時開場　14時開映、16時閉映。入場無料

会場　ＬＰＬＡＺＡビル内　札幌市男女共同参画センター4階　中研修室ＡＢＣ　札幌市北区北8条西3丁目　ＪＲ札幌駅北口正面出てすぐ

問合せ　舟橋栄子　☎03-3332-5797

●会報「山」２０２４年4月号の会員異動欄、「退会」の項掲載の伊藤尊仁様（９２０６）、および中村まさ子様（１６９５８）は、ご本人より退会撤回の申し出がありました。

〈事務局〉

❖編集後記❖

●5月下旬は近江路を歩いてきました。1日目は琵琶湖西岸の坂本からケーブルで比叡山に上り、改築中の根本中堂がある東塔から西塔そして横川まで、「三塔」を結ぶハイキングを楽しみました。このコースの一部は「千日回峰行」の行者さんが歩く道で、比叡山中を1日30㎞も歩く修行をほんの少し体験させてもらいました。

●意図した訳ではないのですが、翌日は、その比叡山を焼き討ちした織田信長の築城になる安土城を訪れました。五層七階の威容を誇った天主跡や本丸跡は礎石が寂しく残るばかりで、往時の豪華絢爛さを偲ぶ縁は何もありません。柿本人麿が詠んだ淡海の海を渡って来る薫風だけが、変わらず吹き抜けていました。

（節田重節）

日本山岳会会報　山　949号

2024年（令和6年）6月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社